

特別支援学校小学部における音楽教材の工夫と改善

和歌山大学教育学部：菅道子（研究代表） 上野智子

附属特別支援学校：清水祐野 久保田真由子 谷口紗由美 小林史

1. はじめに（共同研究の趣旨と経過）

附属特別支援学校小学部の音楽科は、週あたり1.5時間で設定され、4つの観点（歌唱、器楽、身体表現、鑑賞）を含む内容で構成されている。小学部1年生から6年生までの全児童13名を対象としている。生活年齢の幅が大きく、興味や関心を持っている事柄には違いがある。小学部では、より「やってみたい」という気持ち（意欲）が高まる中で、友だちと表現する楽しさを味わいながら無理なく基礎技能を習得していけるような授業展開を考えていくことが研究課題となっている。

そこで、本共同研究では、児童の実態を把握する小学部教員と音楽科教育の立場から授業実践を見る大学教員とで連携し、平成24年度から共同研究としてよりよい教材づくり・授業づくりを模索してきている。

研究の経過としては、下記の授業実践に結びつけるために、まず2020年10月26日（月）に大学教員が授業を参観し、カンファレンスを行った。次に2021年1月25日（月）に大学教員と共に授業を行い、その後の授業の方向性について再びカンファレンスを行った。

2. 研究の目的

小学部教員と大学教員が共同で授業について検討し、「音楽」の授業における教材の工夫と改善を図る。

3. 課題に関して：授業改善にむけての大学教員とのカンファレンスより

10月26日（月）のカンファレンスでは、例年取り組んできた「わらべうた」や「ハンドサイン」の学習を継続して取り組むべきかという点とともに、今後の授業について話し合った。これまで「わらべうた」や「ハンドサイン」を通して、音程感覚を身につけることを目的に取り組んできたが、この2つの学習にこだわることなく、他の音楽活動の中でも十分に基礎技能習得に向けてアプローチできるのではないかと考えた。そこで今年度は、日々の音楽活動の中での児童の実態を把握し、一人ひとりの目標を明確にした上で、児童たちが音楽の活動として意欲的に取り組むことができる「合奏」を中心に授業改善を行うこととした。また、例年「はじまりの歌」として歌唱してきた《ひとりじゃないさ》を《手をつないでこんにちは》という曲に変更し、児童たちが新しい音楽に出会って活動に意欲的に取り組むことができるようにすること、《手と手と手と》の歌唱では、身体で表現することに加えて、テンポ・強弱をつけて歌唱することなどの工夫を確認し、1月25日（月）に大学教員と共に音楽の授業をすることとした。

4. 授業実践

1月25日（月）「友だちと一緒に体で表現したり、楽器の音を合わせたりしよう」

授業当日を迎えるにあたって、大学教員とともに児童の実態や授業の展開などを指導略案で確認しながら打ち合わせをすすめた。児童のめあてとしては、「音楽に合わせて身体で表現すること」と「合奏の際に、友だちの演奏する楽器に合わせて演奏する」ことの2点を設定した。

まず、《手と手と手と》の歌唱では、児童たちが「やさしく・ゆっくり」歌唱できるように、伴奏に強弱をつけ、歌詞の一部を変更するなどの工夫を行った。この曲は、児童たちが元気よく歌唱する曲であるが、伴奏のボリュームを小さくしたり、伴奏を止めて歌唱したりすることで、いつもとは違う雰囲気になり、曲のテンポや強弱を意識した《手と手と手と》になった。

また、「♪手と～手と～」と歌唱する箇所を、身体のような部位のイラストを提示して、その部位を触りながら歌唱する活動も取り入れた。「爪」の部分では、両手の爪を互いにこすりあい、爪がこすれる小さな音を楽しむことができた。

次に、「合奏」の曲として、《かねの音》（原曲は《フレール ジャック》

（Frère Jacques）を選曲し、児童の実態に合わせてアレンジを行った。各パートは簡単なフレーズで作られており、それらを繰り返し演奏して合奏を楽しめるように工夫し、カール・オルフの提唱した合奏法に近い形態を模索した。

この曲は小学部中学年（３・４年）のクラスでは、朝の会で歌っているため馴染みの曲であり、また《グーチョキパーで何つくろう》など

の手遊び歌としても既知の曲である。今回の授業では、この《かねの音》を低学年（１・２年）は「フラッグ鈴」、中学年（３・４年）は鍵盤ハーモニカ、高学年（５・６年）は鉄琴とバスブロックバーなど、いつもの授業では取り組んでいない楽器を加えて、演奏することとした。



かねの音

フラッグ鈴（低学年）

（下で鳴らす） （まん中で鳴らす）

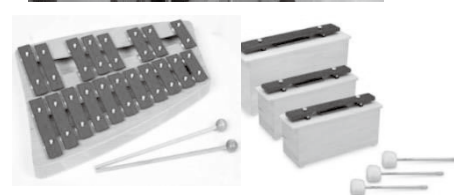
鍵盤ハーモニカ（中学年）

鉄琴（高学年）

バスブロックバー（高学年）

くりかえし

（上で鳴らす「ピン！」）



最後に、大学教員が準備していた珍しい楽器の中から、自分が使いたい楽器を選んで、「かねの音」に合わせて自由に身体で表現する活動を行った。今まで触れたことがない楽器を目の前にした児童たちの多くが「やってみたい」や「これでしたい」など、積極的に参加し、音楽に合わせてながら楽器を手にしてそれぞれの演奏を楽しむことができた。



5. まとめ（授業後のカンファレンスも含めて）

音の強弱をつけることに課題があった本校の音楽の授業であったが、指導者が演奏のボリュームを小さくしたり、高いキーで演奏したりするなどの工夫によって、児童たちが「やさしく歌う」「小さく歌う」歌唱表現ができたように考える。いつもとは違う《手と手と手と》の曲が児童たちにとって新鮮だったように感じた。また、爪をこすり合わせる場面では、児童たちは不思議な音に対して、新しい音の発見があったように見られた。また、歌詞を少し変更して取り組んだ際には、歌詞の意味を知る機会を持つことも必要であり、イラストや写真などを提示しながら、児童たちに歌詞の情景をイメージしながら取り組むことも大切であることも確認した。

「合奏」では、高学年がバスブロックバーという普段使わない楽器を演奏したが、テンポを一定に保ちながら、演奏の土台となる部分で活躍することができていたように感じる。バスブロックバーの一定のリズムを掴みながら、他の楽器が重なり合う音の響きこそが「合奏」の醍醐味であると考えます。他学年については、今回の新しい楽器に触れることは少なかったため、今後の合奏の時間に様々な楽器を使って取り組んでいきたい。



6. 引用・参考文献

岡本敏明 小山章三編(1996)『新・輪唱の楽しみ』音楽之友社。

星野圭朗 (1979)『オルフ・シュールベルク理論のその実際』全音楽譜出版社。